

●学習のポイント●

第2章 穢尊とその教え

この章では、仏教を開かれた穢尊の生涯とその教えについて学びます。つまり穢尊の出家の動機や修行の過程を訪ね、悟りをひらき、伝道の旅を続けられてから、涅槃にいたるまでの足跡を求めるながら、穢尊の生き方を学びます。ここでは、穢尊の教えとして、「中道」「縁起」「三法印」「四諦八正道」について学び、仏教という教えを正しく理解し、私たちがどう生きるべきかを考えてみましょう。

1 節 穢尊の歩み

1 誕生

今から約2500年前、インドの北方、ヒマラヤのふもとの地に、シャカ族(穢迦族)と呼ばれる種族がカビラヴァットウに城をかまえて小さな国をつくっていました。穢尊はシャカ族の太子として誕生されました。父はスッドーダナ(淨飯王)、母はマーヤー(摩耶)夫人で、誕生した太子はゴータマ・シッダッタ(悉達多)と名づけられました。のちに、悟りをひらかれて「仏陀」となられましたので、穢迦族出身の牟尼(聖者)という意味から「穢迦牟尼世尊」^①と尊称され、それを略したのが「穢尊」です。

マーヤー夫人が、出産のために里帰りの途中、ルンピニーの花園で休息されました。そのとき、アショーカ(無憂樹)の枝に右手をそえ、顔を近づけられたときに、すばらしい王子が誕生されたと伝えられています。ときに4月8日のことであったといわれています。王子は、「目的のかなえられたもの」という意味のシッダッタと名づけられました。ゴータマは氏姓で、「最良の牛」という意味です。

仏伝などによれば、太子は生まれるとすぐ七歩^②あるいて、天と地を指さし、「天上天下、唯我独尊(我こそは、天地の間で最も尊い者となる)、三界は皆苦なり、われまさに



図1-1 穢尊誕生(マーヤー夫人堂)

①世尊 世の中で尊いお方の意味で世尊とも呼ばれている。

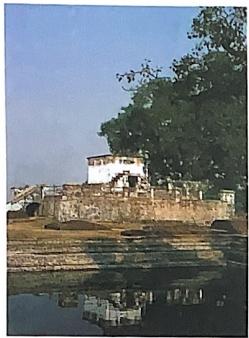


図1-2 ルンビニー 般尊誕生の地。般尊の母マーヤーの祠堂とマーヤーが沐浴したと伝えられる池がある。

般尊の誕生日である4月8日は、「花まつり」(灌仏会)としてお祝いされています。シッダッタ太子の母マーヤー夫人は、太子を出産されて7日後に亡くなられ、その後は叔母のマハーバジャーパティーによって育てられました。

2 出家

シッダッタ太子は、幼いときから師について学問や武芸を学ばましたが、何を学んでも優れた才能を發揮し、皆からの期待を一身に担っておられました。しかし一方、とても感受性が強く、ものごとを深く考える性格に育っていました。

①七歩 般尊が誕生の際に「七歩」あゆまれたのは、私たちの迷いの象徴である「六つ」(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)の流転している世界を超え、さとりの世界に入る決意を示されたのだともいわれている。

②甘露 天の神々の飲料で、最高の滋味とされる。

これを安んずべし」(誕生偈)と高らかに叫ばれ、天は感動して甘露^②の雨を降らせたといいます。

この他にも般尊の誕生については、さまざまなことが仏伝には物語られています。あるいはのちの仏伝編集のときに創作されたものもあるようです。偉大な聖者の誕生であるから、きっとこのようであったろうと、尊敬をもって語られるようになったもので、どの物語にもその一つひとつに象徴されている大切な意味があり、教えられることが多くあります。

ゆかれました。そのことは「樹下思惟」や「四門出遊」の伝えなどに見ることができます。

ある年の農耕祭に、父スッドーダナ王について初めて参加されたときのことでした。泥と汗にまみれて働く人びとの姿が痛々しく太子の心にうつり、また、くわで掘り起こされた土のなかの虫を、小鳥がついぱみ、その小鳥を大きな鳥がくわえて飛び去るという光景を見て、「なぜ生きものは互いに殺し合い、助け合っていくことができないのか」という疑問に心を暗くし、木の下に座って、もの思いにしずむということがあります。(樹下思惟)生き物の弱肉強食の姿を見て、当時は国どうしの戦いがよく行われた時代で、大きな国々の間にはざまっている、釈迦族の国の現実や将来のことにも思いをはせられたのではないでしょうか。

このような多感なシッダッタ太子を見て、父のスッドーダナ王には不安な思いがありました。それは、太子が誕生されたとき、雪山のアシタ仙人が、「星を見て太子の誕生を知りました」と会いに来たときのことです。スッドーダナ王は、喜んで太子の人相をうらなわせました。アシタ仙人は「この上もなく尊い方です」と言いながら、急にふさごみ涙を流しました。それをとがめられて、アシタ仙人は話しました。

「この王子は普通の方ではありません。家にあればやがて理想の王となれるでしょう。また出家されると、尊い悟りをひらいて仏陀となられ、人びとを教化されるでしょう。どちらにしても、私は年老いて死も近いので、とてもこの方が成人された姿を見ることはできないし、また教えを聞かせていただくこともできない。そう思うと悲しく、つい涙がこぼれてしまいました」

それ以来、スッドーダナ王は、国の将来を託す太子が誕生したのに、出家して城を出るようなことがあっては、という心配がつのってきました。

太子の心をひきたせようと、父のスッドーダナ王は、何不自由のないはなやかな王宮の生活をあれこれ準備し、また美しいヤソーダラーを妃に迎えました。しかし、太子は、はなやかに見える生活のなかで、かえってもの思いにしづみ、深くものごとを追求してゆく日々を送られました。



図1-3 城を去る太子（ナーガールジュナコンダ出土、3～4世紀頃、ナーガールジュナコンダ考古博物館蔵）

は、病気に苦しむ人に出会われ、西の門から出られたときには、死者を送る悲しい行列に行き会われました。そして、北の門から出られたとき、そこで1人の修行者に会われ、そのけだかい姿に、シッダッタ太子の心は強くうたれ、出家の決意をかためたと伝えられています。(四門出遊)

太子は人生には必ず老いがあり、病み、死んでいかねばならないという現実の苦しみのあることを自覚され、この苦悩を解決して、人びとにも安らぎを与えるという願いから、道を求めて出家する決心をされました。

やがてヤソーダラー妃との間に王子が生まれ、ラーフラと名づけられました。ラーフラは「妨げ」という意味です。愛する子にとらわれて、求道の決心がぶるという思いからラーフラと名づけられたようです。

道を求めるとする太子の思いはいよいよつくり、太子としての地位も家族への愛着もふりきって、ひそかに王城を抜け出し、ついに修行の道に入られました。29歳のときであったと伝えられています。

3 成道

城を出られたシッダッタ太子は、ひそかに愛馬カンタカに乗ってアノーマー河を渡り、河原で一切の衣服や飾りを捨てて、そまつな出家者の装いにな

あるとき太子は、城外の散策を思いたたれ、カビラ城の東の門から出られたとき、やせおとろえ、杖にすがって歩く老人の姿を見て、「自分ものように老いてゆかねばならないのか」と、心を暗くされました。また南の

門から出られたときには、

マガダ国都であるラージャガハ（王舎城）へ行かれました。そこには、インドの各地から多くの思想家や修行者たちが集まっていました。シッダッタ太子は、彼らを訪ねて学ばれましたが、太子の求める人生の根本問題の解決には至ませんでした。

そこには大きく分けて二つの修行方法がありました。太子はまず、「瞑想によって精神を安定させる」という修行に励まれました。確かに瞑想しているときは心が静まり、悩みも消えたように思われますが、修行を休むと、再び心は騒いで不安になります。このような繰り返しのなかで、太子は「瞑想ばかりでは悟りは得られない」と気づかれ、修行も途中でやめられました。

次は心にいろいろな雑念が起きるのは、体がひきおこすということで、「肉体を苦しめることによって、雑念をなくし心を清らかにする」という修行にも挑戦されました。どの教説も満足できるものでないことがわかったので、一人で真理を求めようと、はるか南、ガヤーの町の郊外、ウルヴェーラー村に行き、徹底した苦行に入れました。ときには一粒の米で一日を過ごし、あるいはまったく食を断つことさえもあったと伝えられています。苦行を続けること6年、身も心も衰えるばかりで、これでは真の解決にはならないことに自覺されました。

身体を極端に苦しめる難行苦行に執着しても真理は得られない。また、かつて王宮で過ごした世俗的な歡樂を追う生活もまた安樂の極みである。二つの極端を離れて「中道」を歩むな



図1-4 苦行する釈尊（ガンダーラ出土、3世紀頃、ラホール博物館蔵）



図1-5 ブッダガヤーの大塔 积尊成道の地に立つ高さ約53メートルの仏塔。

をひらくまでは決してこの座を立つまい」とかたく誓い禪定^{ぜんじやく}に入られました。太子の成道(悟り)のときが近づくと、魔王(マーラ)・バーピヤスが出てきて、禪定を妨げようとしたことが伝えられています。魔王は自分の娘たちをつかって太子を誘惑させたり、魔王の軍勢に命じて力づくで妨害しようとします。これは太子の心のなかでの葛藤であり、あらゆる種類の煩惱との戦いがありました。心のなかの悪魔の姿で表されたあらゆる煩惱にうちかって(降魔)、12月8日、あかつきの明星がひときわ明るくまたたくとき、真実の智慧を得て仏陀(ブッダの音訳で、目ざめた人・悟った人)となられました。太子35歳のときでありました。积尊の成道をたたえ、この地をブッダガヤーと呼んでいます。

④禪定 心を静めて真理をみきわめること。

かに真理を見いだそうと考えられたのです。

苦行をやめて林を出て、弱りきった体をネーランジャラー河(尼連禅河)の水で洗われました。そして、村娘スジヤーターがさし上げた乳がゆを飲んで体力をとりもどされました。それを見て、それまで苦行をともにしてきた五人の友人の修行者たちは、太子は堕落したものと思い、見捨てて立ち去っていきました。

そこで、身を清めて、勇気をふるいおこされた太子は、ビッバラ樹(悟りをひらかれたのちには菩提樹といいう)の下に座し、「悟り

それ以来、太子は、积迦牟尼世尊(积尊)とも、仏陀とも呼ばれるようになりました。「人は、生まれによって聖者であるのではない。その行為によって聖者となる」と、のちに积尊が述べられたように、今、私たちが积迦牟尼世尊と仰るのは、その悟りの内容と行為の尊さによるからです。

12月8日は积尊の成道を記念する日として「成道会」という仏教行事が行われています。

4 伝道

积尊は成道のちも、菩提樹のもとに座って、悟りの内容をかみしめておられました。(自受法樂) 积尊はこの尊い悟りを人びとに説き伝えるかどうかについて考えられました。その内容を人びとが理解できず、かえって混乱させるのではないかと思われていました。そこに天の神が降りてきて、积尊に教えを説き伝えられるように、懇願する(梵天勧請)という物語として伝えられています。

积尊はしばらくの間思索された結果、多くの人びとの幸せの実現のために悟りの内容を、「教え」として説き伝えることを決心されました。

积尊は、その説法の対象として、これまで修行とともにしながら、积尊を見守って去っていった五人の友人の修行者を最初に選ばれました。彼らはガヤーから200キロ以上も離れたベナレス郊外のサールナート(鹿野苑)で、苦行を続けておりました。五人は积尊の姿を見て、「道をすてた者の言葉は、決して聞くまい」と申し合せました。けれども、自信と慈愛にみちた积尊の説法にしだいに耳をかたむけるようになり、ついにその最初の弟子となりました。これを「初転法輪」といい、このことによって仏・法・僧の三宝が初めてそろいました。

法輪とは仏教を表す言葉です。輪に例えられるのは、古代インドの転輪聖王(伝説上の理想的の王)が持つ車が、どんなところへも行き、四方を平定して、よく善政を施したということにならって、仏陀の教えも、どんな障害



図1-6 初転法輪像（サルナート出土、5世紀、サルナート考古学博物館蔵）



図1-7 法輪（アマラーヴァティー博物館蔵）

のあるところにも伝わって行き、衆生^⑤の惡を破り、煩惱を碎くという意味から法輪としたもので、それが回転することが伝道であり、その最初の説法を初転法輪といいます。

三宝のうち「仏」とは、悟りをひらかれた仏陀・釈尊のことです。「法」とは、その釈尊が衆生のために説かれた教えのことです。「僧」とは、釈尊を中心とした仏道修行者の集団のことです。

このようにして、仏とその教えと、教えを信じて喜ぶ人の集まりとの三宝が成立しました。三宝に帰依することから信仰が始まり、三宝を敬うことが仏教信者の大切なつとめとされるようになりました。

釈尊は、インドの社会に根づよく力を持っていた身分の階級制度を、仏教教團に持ち込まぬように、特に気を配られましたので、すべての人は平等に

⑤衆生 人間だけでなくすべての生命あるものをいう。

和合してゆきました。

釈尊は、病に応じて、それに合う適切な薬を与えるように、相手の性格や能力、悩みなどに応じて、たとえの話などをまじえて、眞実の法をたくみに説法しながら伝道の旅を続けられました。（対機説法）釈尊を師と仰ぐものは、あらゆる階層におよび、国境をこえた教団ができあがっていました。

5 入涅槃

80歳の高齢となられても釈尊は、なおもたゆまず伝道の旅を続けておられましたが、最後にめざしておられたのは祇園精舎であったのか、故郷のカピラヴァットゥであったかもしれません。

ラージャガハからサーヴァッティーへ向かわれる途中、ヴェーサリーで最後の安居^⑥を過ごされました。釈尊は体の不調をおぼえられ、死の遠くなきことを予知されました。おそらく心配している弟子のアーナンダ（阿難）に対して、「あなたたちは自分自身をよりどころとし、法をよりどころとするように。そのほかのものをよりどころとしてはならない」（自灯明、法灯明）とさとされました。

そこからパーヴァーに向かわれ、ここで鍛冶工チュンダのもてなしを受けられたとき、激しい腹痛が起こりました。

仏伝によると、釈尊は料理のなかに、体によくないものが入っていることをすでに察知していましたが、チュンダのもてなしを無にしないように食され、また、他の弟子たちには食べさせないようにされたということや、料理を供養したチュンダが悲しまないように、「わたしにとっては最高のごちそうであった。チュンダは大きな功德を積んだと伝えるように」と言われたことなどが伝えられています。

⑥安居 釈尊は雨期に外出すると、草木や小さな虫を知らずに踏み殺してしまうので、一ヵ所に籠もって修行に専念することを勧められた。

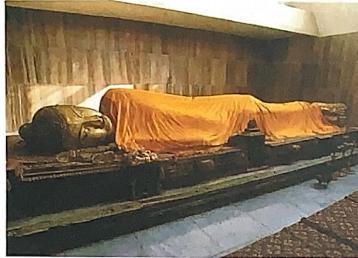


図1-8 説迦涅槃像 积尊入滅の地を記念する涅槃堂内に安置されている。長さ約6メートル。

クシナガラの町にいたスパッダという老いた修行者が、积尊が入滅されることを聞いてやってきて、积尊の教えを聞いて弟子になりたいと、アーナンダに言いました。「仏陀は疲れておられる。今大変なときだから」と、アーナンダは取り次ぐことを断りましたが、积尊はそのことを知られ、「スパッダをこばむな」と言われました。

スパッダは积尊の教えを聞き、三宝に帰依して最後の仏弟子となりました。积尊と別れる悲しみに泣きむせぶ弟子たちに、积尊は慈愛をこめて最後の教えを説かれたのです。

「世は無常である。怠りなく努力をせよ」

これが最後のお言葉でありました。

ときには积尊80歳、2月15日の夜半のことであったと伝えられています。仏教徒は积尊の死去を入滅（入涅槃）と呼び、この日を「涅槃会」と呼んで、积尊をしのびます。

积尊は、病をおしてクシナガラの町はずれにあるサーラの樹林に入られ、2本の木（沙羅双樹）の間に最後の床を設けて、北をまくらに、顔を西にし、右脇を下に、足の上に足を重ねて静かに横になりました。

2 節 积尊の教え

1 縁起

縁起とは「因縁生起」ということで、あらゆるものは単独で存在するのではなく、必ず直接的原因（因）と間接的原因（縁）が、相互にかかわりあって存在し、変化することです。积尊が悟られた真理は「縁起」といっておりました。

「わたしが世に出ると出ないとかかわらず、この縁起の法は常住である」「この世のありとあらゆるものは、縁起によって成り立っている」と积尊ご自身が言っておられるように、これは基本的な法則です。

「独立自尊」とか「自主独立」という言葉があって、自分一人で存在しているように思いがちですが、私は他と無関係に生きることはできません。すべてのものは、相互に関係しあって「もつもたれつ」の状態にあります。私が生きることが、実は多くの人びとのはからいや恵みによって支えられているということを、この縁起の教えから学ぶことができます。

2 三法印

この世のすべてのものは、たえず変化し続けているという、私たちの住んでいる世界や人生の真実の姿を説いた、仏教の基本的な教えに「諸行無常」があります。諸行とはすべてのものを指し、無常とはたえまなく変わることです。この教えは「諸法無我」「涅槃寂靜」の教えと合わせて「三法印」といいます。

法印とは、教えの旗じるしのこと、他の宗教と区別して、これが仏教であるという基準となるものです。諸法とは一切のものを指し、無我とは永遠

①法印 三法印に「一切皆苦」を加えて「四法印」ともいわれる。